

が既に不思議で、今や干拓され山城盆地中よりその存在を失ふ事は喜ぶべき事である。此不思議な湖畔に附隨して今日まで來たが、湖沼消滅と共に茲に一大革轉に直面する事は不思議ではない。當然の事である。然し傳統ある聚落がかくして變化し、改革されて行く事は地理學的見

地より見て興味ある好個の研究資料である。終に本稿を草するに當り、資料蒐集其他に御力を戴いた京都府商工水産課、東一口山田賀方氏、御牧村山田村長始め同村小學校職員各位に感謝の意を表する次第である。完

(昭和九年十月)

近江古地誌解題(一)

増田忠雄

近江の國の古地誌を調べてみると他の多くの地方と同様徳川の文運隆盛の秋を待たなくてはならないが、然し古く逆つて和銅の風土記の撰述は如何と云ふに今に残らず、唯木村正辭博士の採輯諸國風土記補遺に近江國の條があり細浪國及び伊香小江の傳説が所載されてゐるが、風土記の文としては疑はしく、又栗田寛博士の古

風土記逸文には註進風土記の記事があり、前者と共に日本古典全集本の採輯諸國風土記に記載されてゐる、然るに近江輿地志略に「近江風土記と號し二冊紙數六十葉許りある書にて淺井郡の脱簡を記せるも後世の僞作なり」とあり、前述の風土記逸文とは異なるらしくこの本の所在も今は明かではない。

近江國の地誌として面目を備へて來るのは實に徳川時代に入つてからであつて世は太平となり、各地方民衆の交通は盛んとなり、山川草木の状態より經濟事情、信仰、遊覽の便宜を得る必要より民衆的な出版物近江名所圖會風のもの現れ、又詩歌俳文と繪畫に依つて名勝舊蹟の説明をなしたる娛樂的なる琵琶湖志、近江國風俗歌の如きもある。之等は近江國が名所に富み、又諸街道に當れる關係上一層この傾向を強くしてゐる。特に東海道名所圖會、木曾街道名所圖會、伊勢參宮名所圖會等に近江の記述多く、之等と近江名所圖會の出版とに多くの關係のあるが如きはこれである。之等民衆的娛樂的地誌の他に大明一統志の例にならひ、この近江國の精細なる一般的叙述をなし以つて本國の文運隆盛の證明をなしたものに近江輿地志略百卷がある之は當時諸國にて續々出現したる膨大なる地誌編纂の氣運に促されたるものであつて實に十數年の歳月を費し完成したものである。之等本格

的地誌の他、前述の民衆的、娛樂的地誌類を併せて徳川時代には十數種を數えることが出来る。然しその他に現在傳らずして輿地志略編纂當時（享保十九年）存在したものに近江記、近江郡分等がある。輿地志略に近江記に就いては「一二冊に過ぎず眞贋相反する書なり」とあり近江郡分に就ては「神崎郡の人木村源四郎が集めたる書十二冊あり、各地の物産を多く記し神佛の記載不充分なり」とあり、今にその本の所在を聞かず、降つて明治の御代となりしも多くは前代の記述方法に依り、例へば明治二十三年の近江名跡案内記の如きがある。大正、昭和に入つては中川泉三氏の努力に依り近江坂田郡志の上中下三卷の出版があり、之に刺戟されて諸郡志の編纂相續き、現今に至り郡志なきは犬上、伊香、滋賀の三郡を残すのみとなつた、そしてその書冊も膨大となり蒲生郡志の如き洋綴十卷をなすに至つてゐる、近江全體に關しては滋賀縣史全六卷がある。之は時代順に記述したもので書名

の示す如く眞の地誌とは云ひ難き恨みがある。然し之等多くの資料の存在することは我等學徒をして研究に多くの便宜を得せしむるものとして編纂者諸氏に滿腔の敬意を捧げる次第である。以下この小篇に於いて徳川時代の主要地誌及び同一傾向の明治初期の地誌二三の紹介をなす考へである。尙、當地方の地誌關係研究の從來發表されたものに次の數篇がある。參考の爲附記する次第である。

淡海古地誌解題 小島捨市(ぼんや第二卷第六號)

寒川辰清と近江輿地誌略 小島捨市(歴史と地理一一ノ四)

近江輿地誌略に就きて

〃 (歴史地理二五ノ四)

江州土産

全十卷 寫本

著者及び著作年代は不詳であるが筆者は、淡海地誌の編者原田藏六であつて著作は元祿以前と推定する。この考證は後述する。これが事實ならば近江の近古地誌として最も古きものに屬するのである。現在彦根圖書館に卷九、卷十の二卷を藏してゐるが、その全十卷の目次は同圖書館藏の淡海地誌卷一に土産十卷目錄として記

載されてゐるのに依り知り得る。次の如くである。卷一、湖水濫觴、海涯名所、卷二、十二郡高並御領私領分、陸海行程及珍藏名物、湖上圖大小、卷三、舊都地志、古戰場、將軍舊墟、古城當城、卷四、山川嶋瀧水池塚坂草木岩、卷五、長等記並圖、卷六、叡峰記並圖、卷七、竹生記並圖、卷八、石山記並圖、卷九、寺社本記、年中行事、卷十怪異雜錄。

淡海地志

全十三卷 寫本 彦根圖書館藏

本書は卷一の卷頭に全十三卷の目次を記し、次に土産十卷目錄なるものを記載し、次いで漢文の淡海地志序があり元祿二年孟春月、淡海散人、原田藏六卿として、次に本文に入つてゐる。卷十三の卷末には淡海錄跋として漢文跋があり元祿二年中稔、淡海處士、藏六軒原田俊信誌としてある。その本文の内容は卷一、卷二、淡海濫觴、海涯名所及詩歌、卷三、十二郡高、御領、私領分、海陸土産、卷四、諸浦舟數、海陸行程、卷五、武將家記、古今御城記、卷六、舊都古戰

場、卷七、八、山川水石記、卷九、三井寺境圖記、卷十、比叡山記並圖、卷十一、石山寺記並圖、卷十二、寺社本記、年中行事、卷十三、怪異雜錄、引用書目となつてゐる。本書は淡海地志の基本的形態を最もよく止めてゐる淡海地志としては代表的のものである。

淡海地志の異本

淡海地志 全十二卷 寫本 京都圖書館藏

本書には元祿二年孟春日淡海散人原田藏六卿とある彦根本と同一の序がある。目次は海陸記山川水石記、舊都並武將附古今御城記、古戰場近州村高記、繪所及湖船帳、海陸行程同土産記、日吉、佛閣、山記、長等、興廢記、竹生石山記、神社佛閣、遺事雜錄よりなつてゐる。

淡海志近江風土記 全十二卷 寫本 京都圖書館藏

本書は題名、淡海志と稱しその目次は前者と殆んど同一であるがその序に元祿元年孟春日淡海散人原田藏六卿稿とあり、序文の長さも前者

の三分の一位である。

淡海錄 十二卷 寫本 高木利太氏藏

高木氏の家藏地誌目錄續篇に依れば本書には卷初に淡海地志序として元祿元年の漢文自序を載せ、次に元祿三年の淡海錄自叙があり、卷末には元祿七年の和文跋がある。その目次は卷一海陸記、卷二、山川水石記、卷三、舊都、武將、古今御城記、卷四、古戰場、卷五、近州村高記、卷六、給取湖船記、卷七、海陸行程、土産記、卷八、日吉記、卷九、長等記、卷十、竹生島、石山記、卷十一、神社記、佛閣、年中行事記、卷十二、遺事雜錄となつてゐる。

本書は淡海錄の定本とも稱すべきものであつて前述の淡海地志の整理せられたものである。然し近江の地誌と云ふ點からみると未だ完全の地誌とは云ひ難く近江輿地志略などに比べて多く見劣りのするのはやむを得ない。徳川期の最古の地誌とも云ふべきものだからである。而も著者が大津の人であるから湖南の記事が比較的

多く、社寺の記述が特に目立つ。淡海要録には「其書淺陋過冗往々不慚人意也」とあり、近江輿地志略には「此書舊事本紀を本立とし江源武鑑を必要とし眞偽をわかたず辯論なく聞くがまゝに書集めたる書なり」とあるが、未だ地誌らしきもの、皆無な元祿初年には相當の苦心があつたものと察せられる。彦根本淡海地志引用書目には地誌に關するものは近江高辻帖、江州南北侍帖、堅田記、伊勢道中記、道中旅雀、京羽二重、織止等に過ぎない。

淡海録の異本

淡海録

十冊

寒川辰清の近江輿地志略に「大津商賈原田傳兵衛藏六が輯に淡海録十冊世間に流布す」とあり。

淡海録

二十五卷

堀池鈍齋の淡海要録の序に「元祿年間大津人原田藏六著淡海録二十五卷云々」とあり。

淡海録

二十五卷

十二冊

小島捨市氏の校定近江輿地志略の頭註に「寫本のまゝ流布す、普通二十五卷十二冊元祿五年成る」とあり。

江州土産と淡海地志との關係

前述の如く江州土産と彦根本淡海地志との目次を比較してみるとその間の相似に驚くばかりである。然も江州土産十卷の目録が淡海地志第一卷に載せられ、同書卷三の卷初には何故か江州土産十二郡並御領私領海陸行程附珍藏名物と記してあり次に淡海地志卷之三として本文に入つてゐる。以上を以つても兩者間の密接な關係を推定せしむるが殘念なことには江州土産十卷を見ることが出来ない。彦根圖書館藏の二卷と同館藏の淡海地志とを比較してみることにする。それは卷九江州土産寺社本記年中行事と卷十江州土産雜錄と淡海地志卷十二、卷十三とである。江州土産卷九の内容は神社本記、寺院本記、近江三十三所觀音、近州寺社年中行事等の項があり、淡海地志卷十二には

神社本記、近江三十三所觀音、佛寺本記、近州
寺社年中行事の項より成り、その記述にも同一
なものが多い。江州土産卷十の内容は湖邊怪異
甲賀二十一家之次第、謠目錄、淡海隱士、水邊
名等があり、淡海地志卷十三には甲賀一郡在名、
湖邊名、湖上怪異、謠目錄、淡海隱士、名所詩
歌等よりなりその記述も類似してゐる。斯る點
よりみれば江州土産には編者も著作年代も無い
が恐らく淡海地志の原稿をなすものであると推
定される。年代は淡海地志著作年代の元祿二年
以前、恐らくは貞享、天和の頃かと想像される。

(未完)

新著紹介

○北海道地學に關する文獻目錄(著者別) 北海道地

質調査會報告第四號 四六倍判八九頁 十月發行

近年朝鮮及臺灣の地質に關する文獻が集輯されたことは喜
ばしいことであつたが、茲に又北海道の地學文獻目錄が公に
されたことは研究者に對する福音である。本目錄は著者別、
部門別、地方別の三部より成るものゝ第一著者別の部で北海

道帝國大學理學部地質學礦物學教室員諸氏の努力によつて編
纂されたものである。抑北海道の地質研究調査は我國で最初
に行はれた處で、パンペリーの名は我國地學界から忘れるこ
との出來ないものである。明治になつても開拓使はライマン
を主腦とした地質調査を行ひ、その結果炭田が開發されるに
至つたのであつた。以後は道廳の神保博士の研究、地質調査
所の多年に亘る礦物調査、最近に到つては東北帝國大學及び
北海道帝國大學の地質家によつて目ざましい研究が續けられ
てゐる。かういふ状態ではあるが故神保博士調査以前の文獻
は國內流布が少かつた爲めか忘れられて居るものがかなりあ
る様である。本目錄中に採録されなかつたものの中で氣の付
いたものを次に掲げて本目錄の完璧に近づくのを望みたい。

一、開拓使顧問ホラシ、ケブロン報文 開拓使明治十二年

二月刊行 千三百五十三頁

本報告は開拓使應招教師頭兼顧問ケブロンが千八百七十
一年以來千八百七十五年に至る間の自己及部下のモンロー、
ライマン、ウアーフキールド、ワツソン等の報文を集輯した
報告であつて、原文は英文で Reports and official letters
to the Kaitakushi Tokei. 1874. 748p. として公にされて
ゐる。

II' Lyman, B. S.—Report of Progress of the Yesso
Geological Surveys for 1875, and seven Coal Survey
Reports. Kaitakushi, Tokei. 1877. 111頁